宮者部記 下

特3
選
2055
3止

門へ 18
號 2055
巻 3

客者評判記卷之下

江戸芝居

江戸　式亭三馬戯作

上上吉

座　顔　員　偏頗

[座元] そなたびくれかるり狂言ふ善悪あるうもぐ王の呂利おく。おれハ堺町昌員。おれハ葺屋町昌員。もれハ木挽所ひいきといふそ。ゑんでもかぞもつぶ昌員をる芝居だろうと吹聴役者あるうも狂云わるもかるぐ。芝居社を昌員ふ舞昌員よいるもまばよく情のこゝろをみされるこ。外の芝居いふりいてもるれるといふ贔ひいき ひいき えのきゝ代く鬱茶枝流芝居ハ堺町中村座。元祖ふ移れひみをくゆといふ店結ひ快もめるこのひいき コレしハ菅亀町昌員ぢやぐ ひいき コリヤく。ヒしハ木挽町ぢやけれど。畢九もたり方で ひいき ヲサ。

ひらもふれや町の芝居がわるくて座と一の
富でも久つと毎うるかりち 贔屓 それこの
堺町は芝負もおびこと、かの芝居へそゞれたて
もれい氣の毒ともいろね 贔屓 それこと、こら
とらもよそのの芝居はそゞまねるへもの氣のどく慨
のわるくなるや 乃ゑ 東西く、それが別段は負と
中ばりのされどかくとるも是負は一流ちばる
繁昌は基めでたいく、

上上吉 身振好 格別

上上吉 聲色好 格外

乃ゑ 身振好、古くさ色好は人〻一座ふ評にせう
これは芝居執行の内ふも振別のはぞれ思ふ人
とよぞるく流へ身振師なる連とかて別段ふ
立ちはまれば藝者流まふ人流ばりとも評

判のかとはいと、は藝を評ふへくりませねで 座元
ミテラス身振好なる人多好と出こへいく 乃ゑ そこ
ゞ見物で今り年、身振師なる連へ逆くぶ
ムルふよりてたくしまふくでもまふ人同様これは藝
評にくくりませね身振なるまた好といふ
字が目はつけ加家ふのく今り年これは身振ふ
好ぢやそそ月待日はふいくろれど身振師も
めくばる声色ふ好ぢやそそくふせがまれ居
藝とまらうれど、なる色連ふもゆくばさまこ
好の実拙ふ物さん遊山狂歌の摩はそ感く
はは身ぶりも人狂とちこびてはは身ぶり物まふ
あれは則藝師ふのなまり 天竺 そんなら年
生のくちやな 乃ゑ さまうでくり年 さ門 おれ
又江戸はは身振師やなる連中はなと出て
獨くの評ふとらそよりどたのりみくあれな

[声色] そんなら二町まちや、生れの変名だらう、
[乃元] 藝者たいとりちも出さねの
[乃元] それへ連中
とヤスのの面を浮べるりませね
[天世] そんならも
平生は藝浮ききたのく
[乃元] そん待の某れ貴門
何ぴと面目を清とよごるて知人が浪世でもの
[乃元] 分ぶり変名に寒ホハ上まして一寸芝居えるホ
も、変色元分振元、我ら号けてうれ分と
[乃元] ちっとまり歴くの横義の割辺ホ屋と屋で我
ちくまに新をーうあ分とりぐき、弟子屋の役者
が白眼べホらと首と振まべ同ドホうに首を振
て、一ムふ丸分振と世年より一合ろまるに濃の
人が言ま遠うとホ言もくまるど、又れ分のるい人
い毎日ア面ーて声色ちるい難いてしホ屋座
の右ホ掛合てそんる同高ア毎の中に夫の役者
は振新人ならら、口浦ちられ一ムホ耳とそどく

の掛行 [コロ] うねる屋と食て仕はあるとつるも
いくねるの、あるる役減ーもめるりのぢや
[声色連] まんざといつが声色れるもちふ役でたいとを
つきやアぐるるうねふが中ちる主面目ま中ら
が仮ニ座をきのて高業屋とあるりが模
ぞんぷうれだりむくれめが
[大世] そのつーぞう出せ
く。
[声色] [おまんの男] めれもあるる連とよごるるい格別
はうしあるしホい役行が入ることまが宅初ハ
役く稽古ーてめるホも、面義町の往来役さ
ホとめるれがーー上りめのるとるホで町方れ妨る
裏所それるう表通りれ町くとつるひめるれホ
[乃元] それば已まちれ兵天弟壹と勤めるを果ハ二丁町
近辺いよく上達出世いきれて他の役とるれ
ば新人世の役れ声色大立者ともいつるちや
[乃元] それハ別ナ変名連中れ出世一代孤ム平で

評ままるハ老侍の声又好ゑでも高い人の
義評。扨又変色つらひの癖も上方でハ解説
かまへて「上ままるゞ江岡我童でゞり来ると
いつてはうひちまふと「ハそとらでせい」トいふゞ
お宮りれ口癖又江戸表ハ扇とかまへて「序ホ出
ままるゞ老弁半四郎でござい」トいふさ扨でゞり
はたゞ只今ハ扇とかまへて「新をあふいで素面
の出ぢうひ「序ホ出ままるといふハ古風とあり
だまつてはうひ出ともあり。杜若と一つとゐも
あり。一す大和屋とばくり来。出唄をキウカケホ
つゝふとあるりまさ[きてゑん]はうて来まの
てゝ辺ニきまを弾く附「ヨ助るゑ」とゐはろ
悪くても叢ねくと。はゝさ者ゞてれゆと。ア俳
いるい変色と変て居るも変切絵ゆゝよ。変会
ホホ戸惑をとるハゞ[ワ九]扨又振好ゑ来

笛の役不足とゝふて八尚されるゝやしこゝ主
俄の面振出て居ゝとゝ。ひふのゞゝて恭後変
対振仕方ゝ変自慢[つるに]芋菓と二ホ疱結
ホて。浪絶とゝんせ行艦へ風呂敷とかゞせて変
ゝ内ハ働きぢやゞ。ゝ牛の中に油煙ゞ
ゝをちゝいで。者も変姿も油だゝけ
きのゞく。[こせつき男]さゝれゞく。百日かゞゝの代ホ
恵ゞくゝと髪付油で付てゐるかゞゝ
社ゝれど。ひを切てギリとホふむとゝんホ
牛の火ゞ付てゝゝゝと扱かゝき。チリくと
めゝま中へ火ゞ移ゝゆ。ちゝひ居ゝても息
中居ゝで。ちゝも大きゝ焼痕でゐつゝ[ワ九]変
ハ郎席の四工まゐゝ。ゝ
びゝゝら仕組ひ附ハ本蔓でゝり本。扨又あゝ
好ゝハ「まゞゝんとうホハゝませねゞ」トゝ人

めしての座付口上 ひざ 引風を声といさめ
ちりはとれば・宝めておやめゞ臣い徒ふござり
きりゞど・甚限ふ義ふまふも・出只義負はとろ五
の 儀より てゆほい・それい義を生出語りれ
口上ぢや むぐ まづまふ善しれ拙さ 脇九 何へ
恵くめしてもめふむ石九どりのあスを西を。
父母でお里ゞ考れまふ。まづへ代とろ矛拍
夜々人の泡出 大ぜい 待ゐ考こく。

▲ 矛ぶり好

出ぬき目ソレ矛拍とふのへ徒者のくせとを毎
呑とゆゞ山ゞ・伊ふるとも後ぶるていふれ
ホヨ・一す茶麦とそれゞとそもその仏ほゞ牛酔へ
麦をえてものをりへよ・牛酔と氣ちゞしいふる
ゞ言ちゞひとはんゞ仏ふ後へよ・三ア・ふいてえ。
ろりとらかけゞまづはんゞへ耳ふ見ふちると。

矛ぶり好
はんゞ
機敷れ
ふ物と
よふる
ゆゞと
こゝと
出と
引ふ
はんゞ
機敷
と
ゆゞ
出ふ
ふる
ふふ
ふふ
ふふ

ぼんやりとうそうこうらぐ稲ろがぐ。ぶんぶんの詩いあき
たけや。裾のひろうねゆうう。ぶんぶんとうそうこうぶんぶんて出さそれば産
ぶとうそうこうと。それも又だ見ぐくあそ附ぐ
ぶくうぶくと目をつぶらふ。二すてア身振と仕ろ
ゆうぶら。こかうもると坂表がでる。ヨシカ。そこいや
ろうゆると助言やかうそうとこけわアせても
ろうらのや。ぶとうういふ才が加賀屋。ヲットうな
つ目」てまぐから出てくるト坂。二海サ。ツレ又稲ぐ
おあぐ稲ぐうりぐぬかぐみぐそそうんるとざうき
い稲ぐザうぐ。けいとせうぶ。わものでんまぐまろ
ぶけ稲ぐと茶だんの間ゆわれぐぜ。ヨットま
まらあぐ。ソレあれが。トいふ才でお法振てもざ
らう。ソコ。うまろぐ。ヨシカ。ととぐあぐこおりぐ。ト
つろ心。のことんぐろう。ソコデかあぐ行うとそろ。ト
のありまうにそろ。アレサあぐくとぐさうそうろら

まぐろうい。ソリや。ろんぐぐト三ッさぐうてぐろこい
トそろ。ろこでグウイとわふむ。アサぐさうぐちゃア
ろええぐりるいいろ。チョッのこあとこのろるい。

▲あメろ好 ●かけ合

あねき三日 ●一ゆのべろこ七と表三情で。かぐや浅村
ぐと出ぐぐ。ぶ七がかぐやいうねひとり社氣で
ろまりだふけだぜ 陸三回 表三情こかけ合 のこいろをのふ きせこが
尾張屋もとろぐど中だの▲ぐせぐろのみこと
でもたぐ江戸河ぐろいろ稲べ象弱ぐ三月暴氣
いめつぐうだ湖子ぐいて「死出の山ぜぐらく
ろうで念仏わぜてまアうて居ろトいふところハ
ろうぎぐ。モシ一人りと稲ぐぜ。●コウねーやア。アノ仏
ときいこうおのつぐ田三助と▲うんあや。●きいそ
ぐんこうア。稀有けまろぐぜ暴れもならぐ稲ぐ
▲田三助ハ沢渡ぐうつぐやと社ぐ。ぐろハア。のれい

中二階ざいけんと相居らァ。仙女和今函考。
ぐるや富国三助万作。実一だんぶ社若ぐら。
いしまア三役ゑ中ゲたくきんあるうらちゃうぐ
●今年の二十六枚ゆやァごう世のとあゑと
ぜんつぐぜ。ろくふっきり喝ぐらくってちゃてえ
られるんぐ。ア人を馬鹿ゆさその長ぐァ。
豆腐で仮百人使うれさう長屋稼人その仮
▲人見いれゆまるると社会まうけごコウきゆて
ぐるやまぐゆだらうぐ。
「ゆゃゆさ〜きゆ女のこころさ。其方う
忠義ゆめんぐで。家弊相續いさせ
くれう。必ざめんどうちゃくちゃ
くちゃく。ア世の稼く。
●そもぐゆの内ハ社モウちゃとぐうまぐまちゃア
出ゆぐ遠ふスト仏道ゆ世界もまぐうち仮

○声色ちゑひ古風社俳

「モシもしくつひま飛ちゃ
ちゃごろのかんくとろつぷう
あまりなあまもまもあんまりあふむ
つふもわるまちろぺいろ
ふるうい西のふ火屋とひろ
エヘン

「ちひふろろる
あまわぐり
ちろもちの夜ちんの
栄慢の壹く
次とぐ

花あぐーの
姫のぐ
ら

めつと
出ぐあぐ
このお肉
よりや
ちろりや
さろーちる

イヨ
冬の幸四ぐ
ご無義の時で
ぐまま
流切ふあれちや
ぐまま後へちろさま

「ろちぐ
きぐつろちる
「ふけくきあぐの
あぐ
トツテ
キツツ

○聲色の聽衆

「い
あまちこの肉が
ぐ
ぐ
て
あのきぐん
いく肉がきろつ
て
ぐ
イヨ
大和屋ふ大和屋
ぐ
声とけろむ
ぐ
ぐ
ぐのきーぐだん
ぐ
ヨ

上上　安藤　のんき者　癡呆

上上　行　色者　短気

乃気　のんきものよりは生れつきの気質にて生れ
付ものでんぐりとのんきものとの気ちがへでんぐりよ
りは悪性の正でやまやう。扨この正行色者の義評。
まづ生れ付の拙き者とまるで。あのちがひ人
とびはでにたんぶ天井をふる正。それより劣こと
様成れつ人はにひろひ。拙き成れとぢさえたぢ。あて
れと臣。間抜とちがひて。正一正ふるりまやうこあ
の去者ふ相撲しかけ。成れ人も者といいるまこね
百姓まつよりうとめのきろとれば。諸る時ふく
三間抜とちがひて我ひとり働ぶりとする正人。芝居
のんぐりて大ぶれ。その母ちたされて怪らる。場。
大ぶく妻こ人。泥出ふや。ままとるで。

徳亭三孝

出ぬき。日 後藤のわくなる不事まるく ハアイモシラ〜と上ハ
まるたぐ祭もせわさらら 遠ふまで くわひらるけつへよく迄入
九ふらそひりとて。遠ふまで くわひらるけつへよく迄入
年たふ。土方う拾らるりだ。今ハ円樂としておなる
せく墨ふるうら八母とトいれわもも。金春ちゆも六人
とでアるこらけ五ごこれ〳〵九人のこ人のと金
られらやたまく祭ふ手ふ彩く数と清るやちだ〜ど
がくんと遊屋るも乗のわ〳〵ふ。絵上ふちんぺさ
わるので法合ふりをと後者もちやくまるけふ実
を入母とうき。ラワイく〳〵ゆこ撫ふ。後者ふら
ちやくの振ごぎせる負ふ〳〵孫の上菜焼ふく〳〵
仮後本ふ。こと〳〵実ふ中〳〵ふ。こと仏幕が面白い今
明〳〵ふ金屋切ごふ。こと言ふ出てある数ふ後勢
いけぞふくってようぞ。紙くふとふ明れふらんふせ。
ヨヤ〜ふせがふこ。ヨリヤ〜〳〵ふ。せざぞ。イヨは上り。今れ
〜〳〵ふ遊員ふ勝つけふ投ふこふ〳〵ふせふ。アリヤ

こ度同ふちふせ。実で幕ふ出る後者が
義喜と扇幕。ふ。ふ。ハテナ。のうこだふ
と打ふうふ。ふ。四度同ふ弁当で打ふ。アリヤ上
アリヤ〳〵。イヨは上り。ふちふ祭ふ。ラもく
ふ出ふ〳〵。イヨは上り。ふちふ祭ふ。ラもく
茶屋切ぢやア祭ハハテナ茶屋切の名ふ。ふ
ハア茶屋湯ハ貴ふ。ふ。ふとふ。幕ふ。ハ
ハ屋切ふ。実ハ市ふ出ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ
扇幕ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ
市幕ふ。ふ。ハテ市幕ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ
〳〵ふ。ふ。市幕ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

ヲヲトはうら出るせりや豆のとく。イトお屋を
はそるまい。トまえよせる。モシ後ザヤが解ひとさや
あれお待くと是ほうつ。チヤトわちうり茶屋このそば
の下ぶれ抜くそば。この紙でふきの先たいでご
さうさいの。ぶりりや熱ねぐございナント。氣
が利くだらうご別合のちうでおまひるとそを
ハ。月一お徳ものの男ご

五段目

大上上吉

薄雪桜の子孫　廉直

中の巻　つんぶ桜ぶけつんぶ桜と五段の生胴ゆ。こハ
ゆ。初番男　ちんぶで桜ぶの子孫さきくわど
うぶらうくの桜ぶでうくと出ぶうぶのの
ちや　ひる男　いやくまうでうい桜ぶハうれ。ぶ
人の今ぶうぶめぐ。桜ぶゆハかくうれうと
ゆ。ぶ別くぶ桜ぶと。ぶくにハ及ぶまい。薄雪桜ぶ

りぎんで。ぶくぶハ。ぶ子孫ゆ仕打ぶのゆ。ぶ
傾方ひきく　つんれどもこれぶもきこそぶ。
うごけぶも其ゆぢうハ。ぶくぶひとくぶと。ぶ酒つんぶ桜ぶ
のこ子孫ハ。ぶ隅街とて。ぶ遠ぶうゆ。ぶうちぶ。ぶ五段
ぶ。ぶ墨ぶ。ぶうらうぶ。ぶ段　ぶ後のごとく。ぶ花ぶ揚幕
より出ぶ。ぶ遠ぶくかくゆ。ぶ子孫ゆ。ぶ新ぶ。ぶもつれど。ぶ幸
ぶ。ぶ春ぶ。ぶるゆハ。ぶゆぢやゆ。ぶうけぶうぶ。
ぶ打ぶ。ぶ高ぶ。ぶれ。ぶ。ぶ或ハ一ぶ。ぶ上ぶ
ぶ。ぶうり。ぶくぶと。ぶ耳ぶと。ぶれぶ。ぶぶでの。ぶ
ハ一ぶ。ぶもゆ。ぶれぶ。ぶ別ぶ。ぶ低ぶ。ぶ酒ぶ。ぶ。ぶ。ぶ又ハ
ぶりのれぶ。ぶ声ぶ。ぶ紙ぶ。ぶ。ぶ。

ゑどでは雅言もてごく乃遠の
それはそうのうちゞと一日見廻て居るとゝ代上も
あの芝居場[illegible]それ乃名主役の美酒わ
居ばなてゞ時さゝ遠ゝ浅ゝ今り本まの
時く いろゝもたぢや。おう用おう
きてたいく

きぬぎ目 ▲かけ合

▲アたいたゞゞ〜風

代ゝ幕ゝ ゝ
ゝ
ゝ

とゝて来ようの合。
おめくの服こ検用ゝ
おらゝ角て矢ゝ
で二合ときめよう。

矢太ゝとゝ ゝ
店そゝのひゝゝ ゝ

あるの所ゝ ゝ
ゝ
ゝ

▲アしく今生このゝ
つのぞゝとゝが後ゞゝ人ゝでゝ年まで
りうせゝだゝらゞびゝくこゝでゝるのゞ
むゝくしゝ▲おらゝゞゝでも寝よ。ナニヲ
ゞこでゝゝゝゝゝだゝゝでゝるゝ
いうくゝ考ゝゞ楽ゝゞゝゝ。ゝゝゝ
手ゞ考ゝゝる方ゝゝゞ▲ナ所く
さうゞ後ゝくゝゝ。ゝゝゝゝ
白い表ゝゝでゝゝるゞ。ゝれゝ逃ゝゝゞ
▲エゝゝれゝゞ。ゝゝ。後者のゝゝまゝゝ
さうゝ▲ナゞ生ゝこの物語ゝゝゝゞ
考ゝゝ後者ゝ。ゝゝ。ゝゝゝ。ハテ。ゝく
そゝが後者ゞ▲後者ゝゝゝれゝゝ
者のゝゝゝれゝゝ。ゝゝ。ハテ。ゝゝゝ

狂言ごとなる▲ムウ、さうぢあらァ又、やんとうかとうつさ、
ぢうんそもわんとうみなうだの、アレミろいふてくれなさ
ねへぶむせうにふるくるぜおわうこんあれ迷夫
だらう、そしてあのそぢふねうち男いだれぢうきれ極く
ぢうろうとしてあるの●あの男れ同ぢふうんぶ
ぐんえねんぢらう▲ナニうんえ極く下ハテワい同ぢの
言ちらさんアんえるのふそぢにあてええ極くとん
●うんあよ、牡子ハ世ごろうふ食ぢ代世ごあの
世とへぢてくぶまんぢらそぢにあても同ぢるくれ
ハくとうふてけさ▲ハアそのれ屋ぢ牧子ぢ一世でさん
きうだあと、アノゆうれいハふせぢうら牧ぢらう、
●ハ〳〵▲アレくゆうれいぢ陰くきえぢぜく、アレく
わちくうちさ、アモウちうと孫ぢさ、首ト猫のふぢ
ちうとぢうハアきえさ、ヨウ〳〵消ぢさあうく破
たぜ、コウ、今のハ牧ぢうあうちァどうも解せねく今れ

中ぢ笑ちう極くうちうく西ふゆうれいぢぜ、
いハ〳〵ちかるうぢさとちうぢぜ、ちうとうんぢうり、かや
の内へきうイと這入うり、めれハあでも牧業師
うぢ妻ぢうひの幽霊ふるうさのぢ、ヨウく、ゆう
ひうる拍とさ上てあるぢめれいうんぢらう●ゆ
のう御焼さハうァ、ふあ孫れてとうんぢふきさ、
▲めれハ涙ぢぢ、あの下にうんぢかして有ぢらう
●さんまいもハ焼さめぢ中ァ極くハ▲ナニとんぢふ
と、あうさ宮ぢらう●アリやく、ゆうふうさく、
ゆとえうてもいうふ極くぢ、ドロ〳〵くとふると、
カタリくとハ拍子ぢうきこえる、ヨウくあう
ぢやあとふふんぢぜ、先刻うきこえさのハ
めれ一ぢぢ、あの男ぢハびさんとうんぢぐん
から、宮ぢうぢまと食付ふ逃給へい、

イヨ　役者ァリ、

親仁形之紙

年代記

功上上吉

古實者

記憶

万治 江戸大芝居のはじまり。寛永元年より歳月百八十年ヨリ以ことごとく。旦記をさぐり。稽古して。ゆゑ深く。周記されば。ひとの用ハ世と居家とをいふべき老人世の流行をもるゆゑ。前時の役者と謗ぞむしの役者をあなどゞ。各く上るまゝ。昔の一代世話者仕うちは。若衆狂言の高位。万ゑこれ一ッもふねとなきと。古実者よの一藝 (仁義男)

そのかゝりに一す一ゝ。ゑ。醜うとそれば。ひくくゝ枝葉ゑ。長ゑ。ゑ。ゑ。

えぬき三日
一アノまづ後者の宗旨寺なる法名など
ハ元祖寿年追号なれども二代目相続ぶ父の恩と
いふ数句集れ二冊物を板行して是貧連絡若
中員化とそふぶど絶たとゞめる。その本社中ふ
ことぐく故人の法名宗旨寺とまてめるぶそれ
をも元禄十七年ゆら享保十四年までの間亡人
七十餘人の年月日射ぶ〻ふさど記したはさ。
後享和保元年辰年ゆら安永年中までの古人を
めつめて父の恩と残りと綴ぶのハ古今後者
名を草といふりのぶ。ゆりまとこれハ俳諧
ことに千ふう作ハさのさきゆも王子路考堂
の小冊ぐ路考家は藝の根えと出はと紙ゆ又
其跡と追て出泥さうとやふゆら方ぐ十蔓正と
まんぶんのく探まとゞイヤハヤ是ゆ初ぶさゆ
さ。アノまま〻路考ぶ〻ふんの語は春仏ゆとえ。

まま水滸伝ふゆぶ〻ふのぶ〻ふ人さのぶ〻ふ紙の工まさ。
仕打のめる内にも紬ちぎりて今を包む根と
いふとゞ古実のめるゆさ。ゆせといふぶ〻ふく
と云る今をかゆ集めてゆふとれどまふ相ての
どうもうんえぶつるいゆ忘初日にゆと出有て我
紬をちぎりて今を包んゞとめる其時音ふふ
夜装もちぎ接でちぎるゆうに考れど先初日
いその切ふさしかくんその工まと格別ゆ頓智
でハみのゆサア大入大喜りとゆうて むちゆら考る
の語を接く狂言はめれどまゆ語とハ法ふいと
江戸中へ噂をとゞ狂言はとぶを先でゆさ
ハ。ゆふぶみの根ぶ枝考る。実ぶ古実ぶで。世の中
の人ハひふぶゆ成書記ぶ本ぶとゆふゆ考
遠ひ。ゆれハ路考ぶ芸間の語を仕と羽考る手の
形狂言別江戸の舌新伎の大喜りぶ上方まぶく

ゲえて。竪三本竹本性の浄瑠璃に似ることゝある。
ナシート きついりんぐま。スリヤコレ。付の和さ方。寸一ゆへ
脇考の大くま柄。それもぐ。ちふぶふ。ひふぐふ。ぬ。ぬる
の絡ぐま。小紋を打ッ姫りとらふ。世俗の傳りと。
袖ッ。ちぎみて。三百本。と文句ゆもちあこ。全く
元紙脇考の名誉とらふりのぐらう。扨又市川
流の。ぐ。ぐ。ふ。ことふりのい。元紙大牛れ姫ことと
ぐふ。甚ところの野良ゆ。ら。ふ。藤姫。又ハ赤つら。
或ハ烏帽子。大紋ら。ぐ。縞又ハ網巨烏帽子。絲
ぐ。ぐ。ぐ。

云て国十郎が不図ねぶと暮る所の行灯
紙でいろいろ・コデアイ扨いまくつめそ薄ら〻。
本義者でい平九ふが後立まぎれ〻ごとて。
〻おろさんとこる〻ぬ〻ぬ〻ぬ

平左衛門は横ゆく・工子・孝花の法ると山伏わ・コレ
食べと云てきせるを半〻出しさが・園十郎が右
ら吸付ゆうとすると左り出・左ら春う
とそれが右へ出・意地ワるくするゆえ引
抑んで手洗ふ吸付さとらふるがめる・サテ狂言と
仕舞ふがゑいう無茶へ切て平左衛門ときめ付
ゆうとすると・平左ふがいう西の横茂に社女中
ガ居と故きせるでちふ・せこのごト云さうサ
そべでめの時代の役者へ舞茶とたがひ小麿の
き食さのいご其時ゑ物ゆ為を自せごに明と
辞めてゑてなことき・ナニトさき図い意地つく
でらないガトシト狂言の筋ふ図いとうれと考へが
江戸中れ大評判ふろて・其後日ろッイ狂言
ふるひとめるが・足ふ弱しい性でゆごろね
・まんがこそ実悪の名人と呼れ・鬼女の姿

でゆ女房ふ国をまんさせて平左衛門・又指図へ
役者の民部とよばれ・代〻新三郎といろうち
ものく上るれ名人といふのさえ組といふ人ふ
おろうゑない中にも「元祖沢子ハ「指図ふ縁と
の上手とよばれ・其はじめ「三木氏でゆ名ある
まふでゆうが・ふと山道ふ浦ゆて「民部左衛門
ガ中ふ居・浦ふ「沢村宗十郎ガ正の初出よ殺て
居さとのと・浦ガ好俳諧ガ上手で手て社おさ・
手浦伊勢れ芝居へ浦ふ手さて出亀せれ
しガ・ホイ長ごでい評判泥の沢元ガ立ざらるせの吸・
さらば足うらふゆうて学ます・初ふ浦せ保
二回手大坂「故ふ子孫ガ正ハ「沢村宗十郎と
改名ビめて手義墓「国戦録」の狂言ふ大明
れ三ところ「姉川利長」と「ひう見ビる・秋春円の踊りを出ス・究めて上ゆた

うるぐきくとり世」が図、成の通り、「沢村惣子郎」と
縁あて江戸「嘉田社くり」「沢村惣子郎」と
ありつて、伝付もいまゞ上の一字にそなへ世
とぎの惣ゑとて、浮き役とつとめ「車井筒」の
狂言ふ、惣ゑ代、孫三郎「曽我」ふ、「皆丸」「小瀬
れ付、山家屋左ゑ門ふて、大ねとね、それより敵役
と改め「市村座」立役ゆて、生動「今川ゆ」の狂
言ふ、惣ゑ兼の役大でけて「沢越」「池子くゝ」長
ふ、めづらしゝ、ゆて、ゆ我の子郎とよくゝ、ゆ
とて、ゆ、ゆ、「上上白吉」「上上吉」「極上上吉」
ふ六七人ありしふ、急ゝ仕上て、「上上吉」
海老蔵に、ゆゝ、ゆ、ゆ、ゆ

大南りにて極上上吉位と無類と書と付府
江戸にて海老義の母ろう極上上吉ゆり此中ら
翌三年長十郎と改名して江戸中村座へ出合古今れ大南りゑれ
海老義と十六年ぶりに出合古今れ大南りゑれ
ども海老義ハ江戸の名物ゆゑ七十郎と至類
と泥されど両人ゆ合はして大極上上吉ゆ書ゆ
根生海老義無類長十郎と泥二の習ゆ七十郎
又〻大ゆろりにて付府無類となる海老義ハ
大極上上吉ゆり大人国産の内海老義ハ不高り
ゑれど江戸中が呑込で上に立ゆ合良せれ始め
大立物ゆゑ巻頭なれど二枚目ゆ七十郎
とせゆ江戸中れ氣ゆ入ゆ甚ゆ羽三年も国産の
新入せ海老義大ゆろゆゑ長十郎の無類を
ゑて海老義ゆつけ無類の位ゆ大ゆ有類と
ゆりのゆりとて長十郎ゆ至極上上吉と泥

なりされども大人ゆ無類の位ゆ用遠ゆつけるハ
元義ゆゆりゆゑゆ宝暦元年ゆの新見世に
海老義れ七類ゆ入て新ゆ海老義と大至極上
吉と長十郎を真極上上吉と泥ゼーハ大人も
持遠ゆて是ゆりれ位付ゆ入位付の間へ名人
上手と求れ共ゆ高助と改名して間ゆ吉人ゆりゆゑ又〻
海老義と無類と載ゆ元浮別紙ゆ極の上
へ越し位付ハ元祖ゆ入ゆ拝り相遠ゆ入ゆ
ゆ極ゆ表ゆ及ゆ元人も浮別紙ゆ無類之
部と別を分 天至極上上吉市川海老義真極
上上吉助ゆ五ゆ助とゆ入ゆ元人上ゆの位
とゆりゆり近年役者の位付高ゆ入ゆ
ゆ二人ハ義ゆ相両の位ゆゆりれ入ゆ
役者の氏神と崇れ神ゆ入ゆ聖人の風山と名を

強せう。先まもりのごとく初下。森田文左衛門[手]并同
の源三郎ゞせられ。刑ハ[相]延ハ藍瓶の中へなげ
ゝまれ。ゝどの安徳若ゝ。ゝ。ゝ。

元辰年八月十四日「行年廿五」
業務作と外題を出し「大黄りの評判つよくしかそ浪
を呼けりの合巻まて「此文を「源氏」
「夏合巻」「友を」「こと退屈」
「共行茂人」習りて「大和様」「初めの内は大和様」「上流を」
後の絵ゑまと改むこれを上流後を
治三年丙子八月中旬まで中ぐ
の岩井門の名入これを消失せ
代後大坂田民三郎の所望ゆえ
「芸名」「芸能」「満」お習りの内さ

自慢するべこれわだよ【図九】仏は死でムリ来。
ちうれども狂言ふゐ心と今との見所あり。昔の
役者ハむしのこと物ハ無ふ入る藝風今ハ役
者ハ今れ見物の手に入る藝風皆そなへの
恐めりて日覆うらにうつるをてハみけれど時世ヨ
くでムリ手る其内ある商ひの役者ハいよく
器用ぐらごまで藝道ヤぶんハムリませぬされと
昔見物よりむしと見物にも新のるいことぐ
ムリまでるぶわくそんハ後ハ扁ふ滑ドておきる
ヤまもうまづけ平で芸見物丈うそほどりの
うふばと。お氣にさるとぐあるとも。バテ先れ
ちれとお考くでムれべりけて生ちさるぐ商世う
と商まるる【図十】それでも年ふゐ心見物と
ちるらべだまうちやあるれ様くぞ幸四郎ぬと
小四郎とぬるとうもふ【図九】まハむし松本幸四郎

とゝの名人のつさゆ者、お手孝の口癖ゆ小器と
ヤこ、奥樂十町で助度浄とヤさろ〜ゆうゑりの
いさこと そんゆ〜ゆせうしてきゆそゆべの天世おく
河ゆでくぜゑく
去年き三日「おゝッゆ若庶ぶるゆ様ひぶゆ秋ゆ〜ゆき
ナニゾメ八さん面白く祝〜ゆ様仁ゆ又うせゆとゝの新代
ゆで〜〜さう去様ゆのゆ。こゝちゆと老人ゆもつれ
合ゆうえゆさゝ又ゆるく様〜よ足でゆちめ空暦
年中ゆ色男ゆ今ゆ若者のゆうゆ巨燒兵法
ぢゆ様〜ゆらゆ若ゆ様ゆ〜ゆんのるゆだゆゆと
うんてゆ通〜ゆるゆぐゆ〜八百八丁に色豚て建ゆ〜
ゆろゆだ肝暑と化ゆゆ師粕ゆゆ根ゆ先〜捨
たゆのゆゆゆ〜ゆ任ゆるゆよ糠ゆゆ様方だゆとゝゆ
ゆゆ大通とゝゆ路ゆゆゆゆぐゆ山の寒鳥待兼山の
新谷とゝゆ通ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ面白

狸ゆりま山ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ねゝ。者為一ッぺい有さ。イヤ聽るせへ。為るぞめる。
其頃ゝ狂云ハゝ。ちる者ぞ。生河津腰掛ぬ角力
ぞ眞劍勝負ゝ取ッこの。ちるんざぐけゝハ腰掛ぬ河津
がけで負ると。ゝ。ハ翌ハ河津ゝ腰掛樹て負ると。
二日も二日も負の迄ゝとゝ。ゝ。ゝ負遠ゝ向
沐巻で大騒ぐんけ。イヤ十町ゝ本ゝ弁慶で解法
こゝゝこゝ。興樂ゝ為附でぐると押切とゝんざぐら。
ツイ切為ゝ。ゝかゝこの。イヤゝゝハ十ゝ。
ゝこゝ。興樂ゝ為附。毎日
興樂十丁ぬ角力ぐ。日ゝ。ゝ為附興
ゝ興樂十丁とまゝ。ゝ猪負附と為で歩ぬ
ゝ。ハテサ。ゝんのゝ。ゝ羊差て何ゝ。ゝ虚ゝ。ゝ
ゝ。ゝゝまゝ。ゝ。ゝ。ゝとゝめるてこれハ減ゝ
人ゝ性ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ
後。虚でも。ゝ。ゝ。ゝ

たゞ流でゆきけゞを府へ江戸の芝居で王子路考が
梅が枝の浄瑠璃をうもゝ下ゞ七ッぢり所も遠へ
ど小枝の中山へ通ゞこゝ名人の一公ゞる往昔の
役者の身の落さゝのさゝをとう小枝の中山へ
そろる所道へ帰られゞ一念へ上ゞの路考誰ゝ
劣る者も高いゝら粗言とゝひゝゞらも中山
まで面いゝへ。ナント拵別ゞらうゞ実ゝゞゞで
へ今れ役者の一念へ我内の浪花妻へも宅
ゝもぢゝれゝゝゝ

然し刈ち兎角追つぶけて要出置ん。
こゝろの内本面ゝそれ求て求ゝ且借本
丑と雪人物其方様なりゝれ代貸本屋
屋中へ仕舞ゝれ、客者評判記の類篇と
しゝ〻ゝ採出る絶の上品評判ゝ〻ゝ
第十六終上

江戸　式亭三馬　敬白

客者評判記巻之下　畢

自跋

漢書ハ汝南の月旦評あり。
源語ハ兩夜ハ品定の事。
中上ゝ平ゝ唐山の時代
狂言ハ上ハ和げゝ吾
日本の世話狂言。所謂俳
優評判記乃鼻祖ハ。
笠ゝ菊卓吾兩学ハ洛梅。
ゝ〻咬ゝ行ゝ劇在行ゝ。西
鶴圍水ハ諧ゝ。自笑

其績ふ止て。後年其笑
瑞笑ふふ的。其意を績で
評しるぶ。今尚自笑の孫ふ
傳りて手りぐの評判あり。されど
伎藝ぬ評ぬにて拘攣
通と呼まて先哲いちぐ看的人
の評論あるをきるぐ。奉も
個乃好劇的ふ狂蕩。一時
戯場ふ遊ぶ日。意馬を
戯門ふ繫ぎ。心猿と戯虐ふ

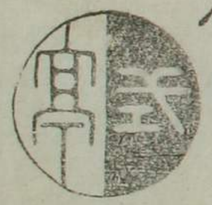
放ち。眼を東西ふ桟道ふ酔。
耳ふ両側の茶棚みぐもふ。
尖棚戯棚合ふ両面の照子
に倡ふ。利用乃打扮。看的の
介科。形容ふ影繻ふ従ぐ
如ふ。聊ふ眺ふ。注げば然ふ生
ありて。浮あり浪ふあり。
両脚寸渾老旦副。小生ふ
小旦ふで。皆ふ穂ふ乃演劇
あるふ。音奏曲ふ音ふ而。

古種を正面より眺めき。
看的人一同ふ雑劇斉
しく戯子反く観劇すれに
似くう。素くを脚色ハえどう
えどう。古宜妙見功者昌賀連
さくのぞでんぼうけん左衛門。
何でも三拾八文字屋江島屋自笑ゞ家名
屋平蔓を拵へ。ぞくくと這
でくりくこ小冊。目く客者
評判記といふ因縁く故。

其くの後序さやう。

文化七年庚午妙九月。
酒ぶ病者若隠居。病後
保粮と名を附て金蘿
山麓妙別業ふ。二箇月
余り居續の間。

武亭三馬戯題



○医師此所先御板番者十とい

仙方延寿丹

▲まげもの代百文。代二文
▲梱のもの代四文。代一厘
代金百疋一剂代銀壱匁

▲寸一ぢんとまり一せんの者とつよく
やぶれかぶるくもけく後ろ新さわ
に右▲ふるの者かろきく用ひくまとやしをそなとと▲こ
ゆの用ふとしも右▲中風ハ寄四方脚を手足ゆびをを足こし
ひざをを足ゆびを足ハいくし右▲寄毒者ハ
せれ出ひやあせ流あせ出入ハせきを
出ると右▲せのつきぢをつるまひ
ふ病ハ冬ハ寒ハ冬ハ
ハ冬ハ
中ハ年
五時冬
ふ多
ものを
右▲
ハ
ふ
ハ
ハ
ハ

引移り。例の無欲と號して
そぶ貴客物欲に満々。貴人
毋文人屋二役者薬店。
こゝ世を他生れ延寿丹きゝ
そぶ師匠の筆頭此
頁帳場れ元ふ屋して客
者評判記を閲ゝる。昌
屋連よりはゞめて出番の子
供ゝ情
を穿ち。京ゝ癡情を述
出ゝ。本家れ役者評判
記をいさゝ原出店乃宮

都ゞ奇ゝと。此ゝ川出の
ひゝゞんきも。嘘よゝ
ゞち評判記ち。虚誕ぢや
ゝ勞本所れ粉五

あ武れ古ふ向で萬ゝと
いふ三馬の閲案をへ
意馬心猿れ棄ふ

門人
古今亭三鳥述

跋

三馬先生客者評判記を編まれし
とあるふ。吉の迚を跋を書しと思へど。
茅ふ板元より催促あり。後に丈背は樹
もつて一句一章を綴ゆ。出べ
き程是非なく三馬が硯馬にて乗く
其通り〳〵と書つゝ。

門人 樂亭馬笑誌

武藤見世ハ三馬が店のとなりにあり

江戸御仏羅油 番頭類 市化粧道具武
まくらの評判をいはゞ武蔵国別所製法所様
仕合をなはせ製法仕出所
いつ〳〵極精製仕出所
あり。なほ〳〵ますます働き業上に
なるべき板元の印なり 本町弐丁目 江戸後ろ七

客者評判記前編跋

吾式亭先生。戯号は一字を取く
馬心猿を意馬心猿と表て
馬ふ作り。これを義押ふ用ひ玉徒り。仍て吾儻おのゝく
甚形を伸ばし。生聲を出はゝて三鳥ハ
古今亭の古は字を引て古ふ作り。益亭ハ
二友は友の字を泛く友ふ作れ。三亭を
はゞあれ一得齋と呼ばゝ。一得を
百ふ作れり。是則一足は大猿ふつまて。
許多の小猿が戯文。ひとつの業をまくん
とて毫ふ遊べれ我なりけり。さ徒ば
先生常ふ戯れていへく。你們二の字を

名告り。馬の印を略して。師茅は約を盟と
ゆへども。二七三八は會日なれば四書五経
の講釈もあり。師として学んで学問も
なければ。茅として教る決もあらば。且
師は七尺去所礼儀もいふ程べ。茅は
三文貰ふ心もなし。茅子が師匠欲
地面の茅子欲。皆友食は戯作者魂
それはさりとさ物数寄ゆら。有難さうは
兼押ようで。侶ってじう真侶て呉れる。
陰嚢も浮りて貞昌連中爰て師匠
が茅子は影ふ。七尺ばりも高の印章
杯意馬心猿の由を妻く尋ずふ意馬

心猿と伴ふて。酒色は街を馳る故お利口
なるお方は目ゆ。一心足ふね馬鹿者と
謗はへ心猿は筆を弄んで滑稽の戯ふ
遊べど。名人上手の諸先生ゆ。二本足ふね
戯作者と呼ばるべ。それを程ふ名人。
千疋の美猿ゆて。我一疋は鼻剛猿を
ま得るが如。遠莫下手の横好耳学問
学ぶ侶の切抜文章神儒佛はやら店
かく。何でも四文は小買に求て。せう委と
そ社営生なれば。おまへぐも精出て。
氣性の高いを下直ゆ引下げ。唯安賣を
勉め人能ある麈ゆ瓜を隠と。四角な文字と

うそ人を。四角な言を鼻ふうみどろーい
ことを言んとそ稼ぐことといふと勿れ。ぶ
ぶぶに笑ひせよ。惡落をうることゆ勿れ
地にを悪く言人。秀句を書く云へ落そ
派ぬる。狂歌と派ぬ。筆と採くぶ紙妻ど。
常ぬ多雑を恥よ。年頭ぬて笑とうへ
戯作者は本意。舌頭ぬく咲かとうへ。
幇間のお茅子とおり人。係と段取目番
と流行。持つ場。捨る場の仏得ぬ。侍と
いふも銭ぬ病年効ぬて自と走ど。尼く
文人騒客を。戯切は戯子ぬたとへ生
旦。両脚。浄。各神偽俳孝荘れ役割ぬる

中ふ。戯作者へ打諢ぬり。さるぬどふ看客が
首くらを直ぬるんぬゆ。利屋と以ぬて
はぬるぬ。絲瓜皮ぬ不利屋式利ぬらしく
ぬりなせべ人自ら咲ぬ。ナ儒先生國
学大人ぬらは。教明せふ学ぶ蹟と追ぬく
秘密に贅の仔細ぬ。ぬは道戯形が優長
の真侶ぬて利屋臭き渾劇と為ふ齊ぬく
看官ぬきあぐれとうそ一人もヤンヤとうぬの
ぬぬれば己が才の程を知り差考は用心
せよ。ぬろぬりぬに聰ぬたる博識めりせば
博試ぬ。ぬちふ只顧文盲とゆぬして白癡を
曉ぬが無事息災ぬれぬ外ゆ傳授ぬ

若此上ゐもお望なら〳〵べ。三八の日を定めく。
近松が院本を溝ど。五十れ日を約して風来
が狂文を論さべ比敬夫も可笑〳〵て茶ゐ
ぶ。と例の鶴ゑ八の字出て。呵〻大笑耳を
洗〳〵ぬく。予は教諭を得てよろこまるく
師茅の盟約ゆく恒ゐ先生れ草庵を訪ふ
頃日客者評判記を閲て肇て教のたゞ
ざるゑ駭く嗚呼新奇ゐるや自笑
其績も筆を舞く〳〵文辞の自在なるゑや
自隨落風来も頭を体心流行の速き
と穿鑿れ深きと西鶴團水のたゞひ及ぶ
所ゐ〻〻嚮ゑ酬所氣質ゑ後篇小野

篁虚亭畫を初として芝居幕れ外あり。
或ハ浮世風呂ゑ浮世の人情を穿ち或ハ
胸機関に人心早替を悟らしむ其他小册
許多ゐれど。古今未發の評論。
寔ゑ戯場穿鑿の一大奇書ゐ〻こに
拙いて。先人由良氏義我乎を称誉ゐゐ倣。
予陰裏もはりこゐ。一番どゐ讃
て曰吁先生れ逸才浜中れ蓮沙中れ金
〻〻ゐとむりれ譬。今新〻くれを〻〻。
鐚錢中れ文錢。万子の中れ好子ゐゐ〻し。
意馬いうんで廣と伴ふべき心猿なんぞ
三年ゐらね戯作者ゐ〻〻や夫意馬ハ

伯樂を遭ひて。評判千里を走り。ぶ猿猴
ふ倚らじて。戯名一聲ふ高きを思くで
面の美押ふ他よ面ふ吉悲すくん。無上
ゆくくよ讃さいまくにいくぎは直腕さん
出ゆて。師匠の業ふ教諭のせりぬと。わり
の侵する声色も。真赤ふ後ふ筆ふて。
おそぞなぐら。ふくるゆくろ。

小石川の山猿と呼ばて
一得齋桃種成ことし
はじめて戯作は改名
徳亭三孝敬白